

6. シンポジウム

Symposium

【1】 平成26年度弘前大学COCシンポジウムの開催

平成27年3月3日(火)、「平成26年度弘前大学COCシンポジウム」を弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大八甲田ホールで開催した。

このシンポジウムは、平成26年度に文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択された本学の「青森ブランドの価値を創る地域人財の育成」に関連して、「地域の視点から教育改革を考える」をテーマとして開催され、教職員や学生、自治体関係者ら約100名が参加した。

シンポジウムでは、佐藤学長による開会挨拶の後、講師として山形大学から理事・副学長の安田弘法氏を招き、「地域の大学とその教育について」と題した基調講演が行われ、山形大学におけるCOC事業の取組みや実例などが紹介された。

続いて「ユニバーサルな視点を持って地域課題解決に取り組む人材とは」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、講師の安田氏のほか、伊藤教育担当理事、NPO法人理事長の米田大吉氏、人文学部4年の田中雄大さんがパネリストを務め、本学の教育における今後の取組みや、地域が必要とする人財育成などについて発表が行われた後、参加者との間で活発に意見が交わされた。



【2】平成26年度弘前大学COCシンポジウム実施概要



平成26年度 弘前大学COCシンポジウム 「地域の視点から教育改革を考える」

日時：平成27年3月3日（火）10時～12時15分

場所：弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大 八甲田ホール

プログラム

- 10:00～10:05 **開会挨拶**
弘前大学長 佐藤 敬
- 10:05～10:50 **基調講演**
演題：「地域の大学とその教育について」
講師：山形大学 理事・副学長 安田 弘法 氏
- 10:50～10:55 休 憩
- 10:55～12:15 **パネルディスカッション**
テーマ：「ユニバーサルな視点を持って地域課題解決に取り組む人材とは」
パネリスト：
山形大学 理事・副学長 安田 弘法 氏
弘前大学 理事・副学長 伊藤 成治
NPO法人プラットフォームあおもり 理事長 米田 大吉 氏
弘前大学 人文学部経済経営課程4年 田中 雄大
コーディネーター：
弘前大学 副理事・人文学部教授 曾我 亨
- 12:15 **閉 会**

【3】 パネルディスカッション

「ユニバーサルな視点を持って地域課題解決に取り組む人材とは」

【パネリスト】

安田 弘法／山形大学理事・副学長

伊藤 成治／弘前大学理事・副学長

米田 大吉／NPO法人プラットフォームあおもり理事長

田中 雄大／弘前大学人文学部経済経営課程4年

【コーディネーター】

曾我 亨／弘前大学副理事・人文学部教授

■曾我：それではここからはパネルディスカッションを「ユニバーサルな視点を持って地域課題解決に取り組む人材とは」というテーマで行います。進行を務めます私は、弘前大学でCOCを担当する副理事の曾我と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日はパネリストとして4名の方をお迎えしております。まず先ほど基調講演をさせていただきました山形大学の安田教育担当理事、弘前大学の伊藤教育担当理事、NPO法人プラットフォームあおもり理事長の米田様、弘前大学人文学部4年生の田中さんです。今日はまず、この4名のパネリストのうち、伊藤理事、米田様、田中さんの順にお話いただき、最後に安田理事からコメントをいただき、そして会場からもいろいろな意見を募りたいと思っています。



まずは今回のパネルディスカッションの趣旨について説明します。

現在、弘前大学は、佐藤学長のリーダーシップの下、「地域を志向する大学」として、地域活性化の拠点として貢献する決意を固めております。地域を志向する科目を大規模に導入することで、青森の実状を深く理解し、それぞれの学問分野において地域課題を解決できる人材を養成しようとしています。地域に魅力を感じ、地域課題の解決を目指す人材を輩出し、青森地域で活躍することが、これからの弘前大学の目標です。

その一方で、大学には、普遍的な知への志向という別のベクトルもあるように思います。地域を志向することと、普遍的な知を志向することとは、どのような関係にあるのでしょうか。普遍的な知には、大きく二つのイメージがあるように思います。ひとつは論文等にまとめられ、他の研究者から検証されるような知識です。これは専門的な知識と言い換えてもよいでしょう。複雑な現象の背後にひそむ法則やメカニズムを解明するというのが、普遍的な知への志向のひとつです。ところが、大学で学ぶべき普遍的な知には別のタイプのものがあります。それは、高度な知識を活用し、新たな価値を生み出すことに重きがおかれる現代社会に不可欠な知です。具体的には、情報を収集し分析し整理するための

知、さまざまな専門家と協働していく知、メンバーのパフォーマンスを高め、アイデアを生み出すための知など、新たな知識を生み出すための基盤となる、汎用的な知です。

これまでの大学教育においては、前者の専門的な知の獲得が強調される一方、後者の汎用的な知の育成については、意識的に取組まれることが少なかったように思います。前者の知を獲得すれば、自動的に後者の汎用的な知も育成されると思われてきたわけです。けれども、新たな知識を生み出すことが非常に重要な現代社会にあっては、汎用的な知を意識的に教育していくことが、強く求められていると思います。

このパネルディスカッションでは、こうした現状を踏まえ、ユニバーサルな知への志向、すなわち汎用的な知というものが、地域の課題解決に取り組む中でどのように涵養されているかに注目し、これからの大学教育のあり方について論じていきたいと思っております。

それではまず伊藤理事から、弘前大学がどのような取組みをしようとしているのか、お話を聞きたいと思っております。よろしくお願いたします。

伊藤：では私の方から、1年くらい前から現在まで、どのようなことを考え、今に至ったのか、これから何をしようとしているのか、ということについて説明します。

COCを申請するにあたっては、申請書を作成する作業が始まったのがちょうど1年くらい前だったのですが、申請まで非常に短い時間の中で、学長をはじめ役員とディスカッションを重ね、申請に至りました。

平成26年度に申請した内容の大きな特徴は、COCと言いつつも教育改革を重要視したという部分です。もちろん社会貢献、研究、教育が三本柱なわけですが、教育改革について大きくスペースを割いて、かなりしっかりしたものを作る必要がありました。教育改革を行わなければならない、ということは

いわば待ったなしであったわけですが、一方で地域志向だけが教育ではないわけですから、いったいそれをどのような軸で取り込んでいくのか、というのが非常に困難でした。しかしながら結果として、地域志向性があったからこそ、しっかりとした背骨が出来たという思いです。

では教養教育をはじめ、学部教育を通して考えたときに、どのようなことを我々は学生たちに保証しなければならないのであろうか、ということが最も大切です。私が考えるというよりは一般的にもそうだと思いますし、先ほどの安田理事の基調講演でも何度も出てきましたが、やはり社会がどう変わろうと、逞しく生き抜くための普遍的な基礎力を育成しなければいけない。つまり未知の課題に直面したときに、粘り強く向き合えるような力を獲得させてあげなければいけない。だからこそ論理的な思考力やコミュニケーション能力の育成が重視されるのだと思います。

そのような意味では、大学には様々な学部がありますが、それは普遍的な基礎力を獲得する手段の違い、であろうと考えています。どの学部で学ぼうと、普遍的な基礎力を獲得していかなければならない。しかし、その手段の違いはあるだろう、ということです。

そこで、私が担当している教養教育では、「主体的・能動的学修への転換」、「文理融合教育による多元的な視点や思考法の獲得」、「国際共通語としての英語能力の獲得」、「地



域志向性(地域が持つ強みや課題の理解、課題解決への意欲等)の涵養」、「国際性(異文化理解、多分化共生)の涵養」を目指した教養教育の体系を考えました。

その中で最も重視したことは、やはり「文理融合教育による多元的な視点や思考法の獲得」です。専門教育に移行する、または社会に出ていくためには、やはり多元的な視点、もしくは思考法の獲得は必須であろうと思います。そのひとつの方法や手段として、地域志向教育を用いていこうということです。

新しい科目として「地域学ゼミナール」を導入します。これは各学部・学科で様々な専門性をこれから学んでいこうという学生たちを6～7人の小グループに分けて、あるひとつの地域課題を与えて、いろいろ議論してもらって、何か少しでも未来を創造してもらおうというのが目的であり、やはり過去に学び、現在を知り、未来を創造するということがないといけないと思います。これは1年生の後期に予定しています。最初は真似ごとになるかもしれませんが、まずは経験することで、専門教育に繋がっていくと考えます。同じく1年の後期にある「キャリア教育」とペアになって、大学で学ぶということはどういうことなのかを身につけていってもらいたい、という思いがあります。

教養教育の高年次化を導入し、学部越境型地域志向科目や専門教育と連動しながらの学部横断型のクラス編成においても、何か課題を与えて、解決に向かって、様々なことを行ってもらいたいと考えています。

いずれにしろ、議論を通じて様々な多元的な視点や思考法を獲得していくには、やはり場数を踏まないといけないと思うんですね。教育課程内だけでは、どうしてもそれは限られてしまいます。ではどうやって場数を踏んでいくのかというと、やはり教育課程外なんですよ。教育課程外にどのようなプログラムが用意されているのか、用意しなければいけないのか。その相乗効果というのがやはり

何よりも大切だろうと思います。ですから、どうしても学習案内などからは見えてこない教育課程外の教育プログラムを整備していく必要があるだろうと思っています。

新しい教養教育は平成28年4月、約1年後に学部改組と合わせて出発を予定しております。この4月から1年間、新しい科目については試行を重ね、より良いものにして、学生たちに提供していきたいと考えております。以上です。



曾我：どうもありがとうございました。本学がCOCに採択されたことがきっかけになって、自治体の方々からも、伊藤理事が指摘された教育課程外のプログラムというようなものをご提案いただくことも増えてきております。それらに、本学の教育を受けた学生が積極的に参加していけると、地域を志向しつつ、なおかつ人間力もそなえた学生が育成できると思います。

それでは次にNPO法人プラットフォームあおもりの理事長である米田様に発表をお願いします。米田様は青森の人材の確保・育成・定着を支援する事業をこれまで続けてこられました。企業の要望などもよくご存知ですので、社会の側から、この教育についてのどのように考えておられるのかを聞けたらと思います。よろしくをお願いします。

米田：よろしくをお願いします。普段思っていることを思っているとおりに申し上げたいと

思います。

いま、青森県内の学生をはじめ、東京の学生や、大学を卒業したもののすぐに職を辞めてしまった若者など、いろいろな方と日々お付き合いをしております。その中で感じるのが、まず今日の題の「地域が必要とする人材をいかに育成するか」というところと言うと、「僕、社会貢献したいんです」とか「地域活性に興味があります」ということを一生懸命言う若者に限って、実は自立というか、自分の活性が出来ていない場合がかなりあります。社会貢献したいのであれば、まず働いて税金払ってよ、と言いたくなることもたくさんあります。

地域志向ということ強く言うときに、都会に対する、自分たちがいないものに対する卑屈な感情の裏返しであってはいけないと思います。東京が嫌だから地域志向なんだ、ということではなくて、やはり自分が生まれ育った街を何とかしたいんだ、という思いがないと、地域という言葉が、言葉だけでひとり歩きしているなど感じる場合があります。

例えば、特に青森の場合は、「うちにはこういう課題があって…」ということはよく聞くんですが、でもそれって、日本全国どこだって同じ課題だよ、おたくだけの問題でないでしょう、と思うことがあります。弘前であれば、この弘前独自の、この地域だけにある課題なのかどうか、ということはいっきりと見る必要があるだろうなど。他としっかり比べるということがすごく大事だと思うんですね。

私は八戸にある大学のお手伝いもするのですが、八戸には弘前にない良いものがたくさんある。でも、弘前にも八戸にはない良いところがあるので、同じ県内であってもやはり比較検討というか、しっかり見比べて客観的に捉えるということが、地域の捉え方としては大事だろうと思います。

また、このような席に私のような者が座っていること自体、弘前大学のCOCの取組み



は非常に野心的だなと思うんですが、大学で学んでいる知識が実社会で通用しない、通用する場合もあるけど、しない場合が多いんだよ、ということを企業の経営者たちは常に思っているんですね。「大学でこれを専攻してきましたから」、「これを学んできましたから活かしたい」というのは、気持ち的にはわかりますが、そんなのまず通用する話じゃないよね、ということも多くを経営者たちは思っている。資格にしても、ないよりはあった方がいいのはもちろんですが、その過程、一生懸命資格を取りましたというプロセスは重視しますが、その資格を持っているだけで何とかなるというものでもない。私の弟は中小企業診断士ですが、診断士だけでは食べていけないんですね。けっこう難しい資格ですが、一生懸命取ったとしても、それだけでは食べていけない。

昔の、それこそ普通に前年比をクリアしていけばいいような時代が続いていた頃は、知識の量が能力の量、というか差だったので、当然県内では弘前大学が一番で、次に…と順位があり、青森県内の企業なら、昔の基準であれば、まずは弘前大学から採用して、でしたが、今は違うんですね。弘前大学でも落ちる子はたくさんいますが、一方では青森県内の他の大学からでもちゃんと採用されます。それはたぶん、知識の差とか偏差値の差、ではないんですね。もうすでに社会がそうになっている。そのスピードに学校教育というか、

いわゆる普遍的な知が追いついていないのだろうな、というようなことをすごく感じます。

正解を知っているかどうか、ということは一番大事なことでなくて、正解に辿り着くまでのプロセスをどう理解できているか、ということがすごく大事だと思います。大前研一さん(※国際的に活躍する経営コンサルタント)が、自分の孫がスマホをいじりながら人の話を聞いて、「おじいちゃん、その話、違っているよ」という指摘をするような時代になったと嘆いていらっしゃいましたけど、そういうことだと思うんですね。

どうやってそこに辿り着くか。正解ではないかもしれないけど、とりあえずやってみて、正解に近づこうとする、そのトライする姿勢がすごく大事。でもそれは、学校ではおそらく今まで教えきれていなかっただろうな、少なくとも机の上でいくら教えてもわかるものじゃないだろうな、と思います。

そこで、地域との関わりということになりますが、社会や企業などで動いている中に行くと、正解をちゃんと見つけて、それを理屈づけて、正しいからやる、というような手順を踏んでいると間に合わないんですね。動きについていけないんです。だから、とりあえず前例がどうだとか何とかというよりも、まず一歩踏み出してみる、ということがすごく大事で。その踏み出す過程、目の前にある課題が非常に近いというのが地域の良いところだと思います。それは企業であれば中小企業や地域の企業であって、実践の場としては非常にやりやすい。大学生がお試しをするのであれば、なおやりやすいと感じています。

最後に「人材とは何か」ということですが、それは能力が高いとか、こういうことをやってきたとかではなくて、その組織や地域に非常に合っている、お互いのストレスが少ないというのが、良い人材なんだろうなということを感じます。

リーダーを弘前大学で、COCで育ててい

こうと考えていると思うので、弘前大学を卒業する学生たちには、自分がリーダーになるだけではなくて、次の世代のリーダーを育てる、その意識をぜひ持ってほしい。私は津軽出身なのであえて言いますが、津軽の一番の悪いところは、次の世代を育てる力が八戸に比べて決定的に弱いところなんです。この事業を通して、そこが前向きに変わってくれるといいなと思います。以上です。



曾我：ありがとうございました。先ほどの基調講演で安田理事が、「世界人口がこれから増えていく」という話をなさいましたけれども、世界中を見渡すと、高等教育を受ける人数も増えていて、ますます日本の競争力が問われることにもなるかと思います。その時に必要になってくるのは、今の米田さんのお話にもありましたように、専門的知識の多さでその戦いを勝ち抜くということではなくて、むしろいろいろな知を組み合わせながら作っていけることが大事というご指摘だったと思います。

それでは最後に、人文学部4年生の田中さんにお話をいただきたいと思います。田中さんは2年生の後期と3年生の1年間、計1年半にわたって、ビジネスシミュレーション実習を受講されました。その中で非常に中心的な役割を果たされ、商品開発にも結びつけたという話も聞いております。今日はそのビジネスシミュレーション実習の内容をご報告いただくとともに、そのなかで何を学んだのか、

お話いただければと思います。よろしくお願いいたします。

田中：よろしくお願いいたします。ご説明にあったとおり、3年生のときにビジネスシミュレーション実習を経験しました。私たちの1学年上の先輩方も「弘前をPRするおみやげ袋の開発」といった同じような実習を行っておりまして、それに引き続き第二弾として、「ご当地かき氷シロップとパッケージの開発及び販売」を1年間通じて実施してきました。

まず課題として、青森県でお祭りが盛んになる8月に多く販売されるかき氷シロップを、通年使える多用途なものに出来ないか、そして後々は全国展開へ、という野心や思いを含めた要望を企業様からいただきました。私たちは全国展開をしていくなれば、県産りんごの果汁を使用したかき氷シロップをと考え、開発することになりました。

まずはターゲットを決めまして、実際にそのターゲット層に合わせて約200名程度のアンケートを行い、かき氷シロップの味・色・香り、そして名前の決定等を行っていきました。

やはりかき氷シロップだけでは従来とは特に変わず、何か付加価値をつけたいと考えました。実際に調査してわかったことですが、かき氷シロップは夏以降になると、かなり余って捨ててしまうとのことでしたので、夏以降も使えるような工夫をしようと考え、



付加価値として、かき氷シロップを使って風味を味わえるデザートやドリンク、さらにはりんごが肉を柔らかくするという特性を用いた、他にはないレシピを作成しました。

同時に、ご当地パッケージのデザインにおいて「青森県のりんご果汁を使用していること」、「1年中使っていただけるようなデザインであること」という点を考慮し、遠くからでも顧客の目を引き、青森県をアピールできるようなデザインを2つほど考案しました。また、新聞社各社にもプレスリリースを行い、認知拡大にも努めていきました。

この実習では、学生がそれぞれ企画・営業・調査といった役割に応じて進めていくという形が取られており、私は営業を担当いたしましたので、ここでは営業活動を中心にお話いたします。

営業活動においては、弘前市内の郷土料理を扱っている居酒屋であったり、観光客が多いカフェなどに自分たちの足で赴き、お店の方々に紹介させていただきました。その中で非常に有効だったのが「これじゃ買えないよ」という、購入出来ない理由を実際のお店の方々に聞くことが出来たことでした。

その後、青森県内のみならず、県外へのアピールも必要ではないかと考えまして、認知拡大の目的で、包装資材を取り扱っている企業の盛岡と仙台の営業所に赴き、実際に営業を行いました。この営業で8本入りを3ケース、計24本を自分たちの手で販売し、購入させていただきました。

また、弘前市内のお店で店頭販売させていただいたり、病院やゴルフ場、田舎館村の田んぼアートなどでも実際に販売させていただきました。結果的に1年間で約80本以上を販売することが出来ました。

弘前市内の営業では、商品自体の良さを伝えることは出来たのですが、試飲などにより実際の味の良さを伝えられず、相手側の本当に求めている情報を与えることが出来ませんでした。試飲が出来ないという状況下で、試



飲をさせなくとも味を伝えられるような営業法を当初考えきれなかったことで、非常に悔しい思いもしました。

この失敗を踏まえ、県外での営業では角度を変え、包装資材を取り扱っている会社の場合は、ご当地をイメージしたパッケージ案であったり、夏以降にも使えるという、従来のかき氷シロップのデメリットを払拭できる点を強く打ち出したので、売上という結果に繋がったのではないかと考えております。

以上のような活動を通じて、一番心に残っているのは、外部の制限下で、自分たちの思いを伝えることの難しさを痛感したことです。というのも、企業側と私たちとしては、食品なので「お客様に食べてもらいたい」という思いがあったのですが、大学側から「衛生上の問題で試食は出来ない」という回答をいただいたときに、学生が企業と大学の板挟みになりました。こういった実際に自分たちの力ではどうしようも出来ないといった、社会に出てから必ず直面する状況において、困難に対する対応力というのは、かなり身についたのではないかと思います。

自分の意見を周りの圧力により簡単に引き下がるのではなく、結果はともかく、なぜ自分はこうしたのか、という熱意を大学や企業に伝えることで、売上に繋がったのではないかと考えております。以上です。

曾我：ありがとうございました。実際の商品

開発とその販売を通じて、困難に対する対応力、耐性を身につけたという、まさに人間力の向上に役立ったという報告でした。

しかし私は、この報告に少し疑問を感じておまして、田中さんは非常に魅力的な方なので、そもそもこの教育を受ける前から対応力があつたんじゃないのかなという疑いも挟みたくなるのですが、そのところはいかがでしょうか。

田中：自分にその能力があつたかというのは正直わかりません。しかし、このような事業を通じて、自分の能力に気づくきっかけにはなつたのかなとは考えております。

学生自らが営業や企画や調査などの役職に「じゃんけん」をすることなく、自分から率先的にこれをやりたいという形で担当するのですが、その時点で、学生は自分の長所がどこなのかということは、少しはわかっていると思います。ですが実習では、営業は営業担当だけで出来るものではありません。やはりグループ全体で、自らの得意分野ではないところも補完し合うことによって、一人で出来るものでもなくとも、グループの総合力で実習を進めていきました。

私に元々そういう能力があつたのでは、ということについては正直わかりませんが、この活動が気づくきっかけになり、学生にとってはなかなかそういう機会がないので、とても有効で貴重な機会だったのでないかと考えております。

曾我：ありがとうございました。それでは発表が終わりましたので、ここで安田理事からコメントをいただきたいと思ひます。安田理事、よろしくお祈ひします。

安田：それでは私が感じたことを紹介させていただきます。まず最初に曾我先生からパネルディスカッションの趣旨説明がありました。「ユニバーサルな知への志向、すなわち汎用

的な知というものが、地域の課題解決に取り組む中でどのように涵養されているかに注目し、これからの大学教育のあり方について論じていきたい」というのが的を射て、今後の大学教育を考える上で、とても重要だと感じました。

曾我先生のこの趣旨説明を聞かせていただいたときにふと思い出したのは、20年位前から共同研究をしているイギリスの友人です。今は80歳くらいですが、その方には頻りに山形大学に来てもらって、共同研究だけではなく、講演もしてもらいました。イギリスは人口あたりのノーベル賞の受賞数が最も多いそうで、イギリスの教育は日本の教育と何か違うところがあるのではないかと思います、イギリスの教育制度の紹介などの講演を依頼しました。そのときに興味深かったのは、「知的好奇心をいかに持つか」ということを強調されたところでした。結論から言いますと、知的好奇心を持たせるのは難しいけれど、イギリスでは子どもたちが小さいときから、「他よりいかに違うのか」を評価する文化があり、これは知的好奇心の育成と関係しているかもしれないと思いました。日本はわりと「金太郎飴的」で、周りを見て、「他といかに違わないか」を評価する文化がありますが、それがイギリスと違うと感じています。知的好奇心を持つことはとても重要で、学生諸君がこれを持つにはどうしたらよいのか、今後も考え続けたいと思ったところです。

それから伊藤理事のご意見の「粘り強く生き抜く、そういった力をぜひ大学生活を通じて、さらに一生を通じて持ってほしい」というのは、私も全く同感です。そのために大学4年間で場数を踏んでいろいろと経験してほしいと思います。先ほどの基調講演でお話ししました、私が生き方を学んでいます安岡正篤先生が、「人間がいかに出来るか、人間力をいかに鍛えるか」というのは、論語とか言志四録、さらには菜根譚等、生き方に関する聖賢の書を読み、ありとあらゆる修羅場を経験



する。そういうことで人間力や胆力もついてくる」と仰っています。やはり大学では場を踏む、場を準備するのがとても大きな一つの役割だという気がします。基調講演でご紹介しました「学生大使派遣事業」もそうですが、事業を開始した4年前はとにかく「新興国の協定大学に行き、英語で日本語を教えて来い!」というような感じでした。その後、この事業を検討し、行く前に派遣の「目的」をしっかりと考え、さらに行って具体的に何をするのか「立案」し、それを現地で「実施」する。そして、帰ってきてから何が身についたか「振り返る」。「PDCA」を学生自らが考えて実行する。そうすると、行く前に比べて、自分はこれだけ力がつき、自分の成長がわかる。自分が自分を知ることがとても重要だと思います。

米田さんのご意見で、共感した部分は、社会の動きが早い中で、まず第一步を踏み出すということです。失敗を恐れずに、失敗から学ぶ。山形大学で行っている、「社会人育成山形講座」の中に、リーダーシップ教育があります。授業担当者から挫折経験を話してくださいと頼まれました。私の人生は、七転び八起きの人生で、多くの失敗を通じながらいろいろと学びました。それゆえ、米田さんのご意見に共感したところです。

また、次世代を育てるというのも同感しました。育てるというのは、我々も育つということで、お互いに育ち、育てられる。そうい

った関係が今後ますます重要だと思います。

それから田中さんは、大学生活の中で貴重な経験をされて、困難に対する対応力も身についたということを紹介されました。このような授業を通じ、経験を積みながら学ぶというのがとても重要だと感じます。

問題発見解決型授業やキャリア教育など外に出ていろいろ学ぶことはとても重要なことだと思います。一方で大学での4年間、自由な時間がある中で、本質的なところといえますか、しっかりと聖賢の書と言われる古典を読みながら、じっくりと生き方を考えるといったことが、なんとなく廃れつつあるような気がします。やはり「二度ない人生をどう生きるか」ということを考える上でも、読書をし、思索することが必要に思います。また読書習慣を大学生の間に身につけることも重要なことだと思いました。

曾我：ありがとうございました。特に最後の古典を読みながらじっくり考える、というのが大切だと感じました。課題解決型というと、つい目先の課題に目が行きがちですが、大きく俯瞰してものを考えていくことは、課題に取り組むときにも、すごく大切なことだと、改めて感じました。

それでは今から会場もオープンにしまして、皆さんからご質問・ご意見をいただきながら、議論をしていきたいと思っております。それではどなたか、ご質問・ご意見、どんな小さいことでも何かありましたら、お願いいたします。

会場：(弘前大学理事)今日はありがとうございました。私から4名の方々にお伺いしたいのは、この教育プログラムを進めるにあたって、どのような教育をするか、ということは大事だとは思いますが、それを行うために必要な教員や事務組織をどのように育てていくのか。恐らく安田理事はCOCを始められて、相当ご苦労されているかと思うのですが、

これまで、そしてこれから、それを支える教員、職員について、どのようにしてこられたのか、またはどのようにしていこうと考えているのか。伊藤理事はこれからどのようにしなければならないのか。米田理事長や学生の田中さんから、ちょっとこうした方がいいぞ、などのお話をいただきたいと思います。

曾我：それでは安田理事から、よろしくお願いいたします。



安田：私が驚いたのは、山形大学の先生は本当に協力的で、多くの先生が「採択になったのでやらないといけないよね、じゃあ協力します」という感じです。そういう意味では、これからCOC事業が良い具合に展開できると考えています。

職員の方は、教員の方以上に理解して動いていると思います。とても感謝しています。大学は、教職員が元気で、前向きで、オーラが出ていることが重要で、それは学生諸君にも伝染ります。大学改革には、教職員の意識改革がとても重要に思います。でも教員の意識改革って難しいですよ。ですから、職員の皆さんの意識改革という大げさですが、私が任されている教育・学生支援部では、意識改革の試みも行っていきます。そのひとつに、一週間に1回、「山桜通信」というメールを全員に流しています。その目的のひとつは情報の共有ですが、もうひとつは「生き方について問題提起をする」ことです。具体的には、

今日もご紹介しました安岡正篤先生の言葉を紹介して「一緒に生き方を考えましょう」というような感じです。

また、民間の会社みたいに、月曜日の朝に朝礼をやっています。この朝礼でも生き方について考えようということで、佐藤一斎先生の「言志四録」の箴言を紹介し、それに関係する安岡先生の箴言を紹介します。そして参加者が箴言に関する意見を交換します。これはもう3年くらい行っています。

さらに職員の皆さんと月1回、「生き方を考える読書会」もやっています。「二度ない人生をいかに生きるか」について考える。そういった読書会をやったからといって、急に生き方が変わるわけではないのですが、何か少しずつでも大学における自らの学びの文化を作りたいと思っています。当初は「先生、そんなのやっても誰も出ませんよ」との意見もありましたが、やってみれば「先生、とってもいいですね」と、メンバーが言ってくれます。私も朝礼などを体験して、すごく刺激や勉強になっています。そして、元気ももらっています。読書会に来た人が中心になり、そこから新たな読書会がアメーバのように広がり、自ら学ぶ文化が大学に広がれば良いと思います。

伊藤：いわゆる「教育改革」については、全体として皆さん協力的だな、という印象は受けています。やはり、今のままじゃいけない、というわけではないですが、何か一歩踏み出す時期なんだな、ということは何かしら皆さんも感じているのかなと思っています。

専門教育とか教養教育とかいろいろな教育の言い方がありますが、やはり基本は「学部教育」という一括りで先生方に考えていただける時期が早く来てほしいと思っています。卒業研究、卒業論文を書かせるところは、特に先生たちにとっては最も力を発揮されたり、最も楽しいところだとは思いますが、「これは私の仕事じゃないよね」とかもしそうい

う気持ちがあったとしても、それも含めて全体として「学部教育」という枠組みで4年間の教育を担当していただけるような形がとても必要になってくるかなど。教養部が無くなってから十数年経ちますが、まだまだそういう意識が抜け切れていないと思います。学生たちは1年生で入ってから卒業まで、切れ目なく教育を受けているわけで、先生たちの方が「ここまでは教養、ここからは専門」というようには分けないで考えていただけるような環境作り、もしくはカリキュラムを考えていければとは思っています。



米田：実践的なことを大学でやろうとすると、外の力を活用するのが一番良いと思います。

例えば「弘前大学で何かやってるんだよ」というのは、企業の社長さんたちはみんな言いたいので、とても協力的だと思います。母校であればなおさらです。私も名刺に書かせていただくと、「弘前大学で何かやってらっしゃるんですね！」と言われて、ちょっと心地良かったりする。ただ、企業の経営者や商工会議所の偉い方などは、経営のプロではあっても、人材育成とか教育のプロではないので、ちょっと止めてほしいなという方はたくさんいると思います。ですので、佐藤学長はしっかり発信されてはいますが、大学としての理念、「弘前大学のCOCが求めているのは、こういう人で、こういう考え方で、こういう行動をとってほしい」ということをはっきり出した上で、「協力してくれるなら

お願いします」と、大学側として堂々と言うべきであって、遠慮する必要はないと思います。まだ大学の方が遠慮されている感じがして、もっとガンガン言った方がいいと思いますので。「こういうことでやってくれるのであれば、ぜひお願いしたい」ということを、しっかり発信するということがすごく大事なのかなと思います。



田中：唯一の学生なので、必要な教職員の育て方というのは全然わかりませんが、学生の目線から見ると、「大学のビジョン」というものを学生の何割が知っているのかなということです。船頭だけ「南に行こう」と言っているような状況で、船員たちはどっちにいけばいいかわからないのが実状なのだと思います。

そういった中で「地域を対象とした課題解決型学習」は実際に私も携わった実習ですが、これはぜひ進めていただきたいと思います。実際に就職活動を経験しましたが、自分が主体的になるような授業を通じている学生とそうではない学生とでは、やはり話すことや、その人の表情などは恐らく全く違います。学生として一番大学に携わるのはやはり授業なので、授業の中にこういったローカル科目を積極的に盛り込めばいいのではないかと思います。

曾我：ありがとうございました。最後の点については、伊藤理事の指導の下、この春からシラバスに「地域志向科目」が表示されること

になりました。学生にはっきり見える形で地域志向をアピールしていこうと考えています。安田理事のお話は、やはり広く、深く、耕すという試みなのかなと思います。それではまた質問、コメントなどありましたら、よろしくお願いします。

会場：(弘前大学教育学部准教授)良いお話を聞かせていただいて、大変参考になりました。ただ、私の中で矛盾といいますか、どう捉えていいのかなというのがずっと残っていることがあります。

私は教育学部を担当しておりますので、学生には免許を取得させて、地域の学校に受験に行かせ、そして人材として派遣する、というのが当然のことだと思っています。弘前大学には青森県外からも多くの学生が来ておりますが、やはり地元志向ですよ。学生にしてみれば、やはり(青森県外の)地元に戻って教育したい、そこで自分の力を発揮したい、と思うのがごく自然だと思います。最初から弘前大学として地域に貢献するんだ、というのを全面に出して、「青森県の人材」を作っていく。これも大事ですが、やはり学生のニーズとしては合わないのではないかと、という点があります。

また私が指導している学生で、ある県の教員採用試験を受けて合格したのですが、一方で「日本人学校に行きたい」という学生がおります。若者を育てている場に直におりますと、やはり彼らの「地元にも戻りたいけれど、ゆくゆくは帰りたいけれど、まずは世界に出てみたい」という気持ちがあるのを、ひしひしと感じるわけですね。私たちとしても、生まれ育ったところで活躍するのも良いけれども、まずは外を見てこいよと。外から見ないとわからないことがたくさんあるわけで、まずはそこに行ってこい、そこでいろいろやってこい、そしていつでも帰ってこいよ、というスタンスがあってもいいんじゃないかと。

地元貢献していることを表すものとして

何かしらの数字があるわけですが、それが高ければ大学が貢献していると言われるのかもしれませんが、もう少し先、「青森から、弘前大学で教育を受けて、世界を見て帰ってきました。Iターン・Uターンしてきました」という学生が、あと10年20年先に地域に貢献する。確かに少し遅いかもしれませんが、そのような見方や地域貢献もあっていいのではないかと思います。どうもCOCで、地域、地域となりますと、経済と産業に関することは直接有効かもしれませんが、こと教育に関しては、やはり年数がかかる問題ということもあって、どうしても「木を見て森を見ず」みたいになっているんじゃないかなというのを感じております。これについて、何かご意見ありましたら、お願いいたします。

曾我：ありがとうございます。これについてどなたかご意見ありますでしょうか。

米田：まずは「地域に貢献する」こと自体が「青森県だけのため」ではないと思うんですね。地域に貢献するという課題や、その目的で行うことは、おそらく自分が地元に戻っても、どこにいても、課題の捉え方は一緒なので、学びのひとつだと思えばいい。そんなに固く考えなくてもいいのかなと。いわゆる、1回外に出てまた戻ってくるというのは、すごく大事なことだと思います。私は国から予算をもらって、青森県内に人材を残す事業を行っていますが、学生たちには、「東京行け、東京行け」と言っています。東京の方が良い職業もたくさんあるわけですから。そこで培ったスキルを青森に持ってきてもらえればいいわけですから。学生の人生、選ぶ道によっては、そのほうが良いというような場合もたくさんあります。ただ今の青森の場合は、30歳前で帰ってくると、年収が3分の1とかになってしまうので、そういうネックがあるにしても、1回外に出るということはすごく大事なことで、その考え方とCOCが矛盾するわけ

ではない、と思うんですね。プログラムのひとつだ、というように考えればいいんじゃないかなと私は捉えています。



伊藤：「地域だけのために教育をしているわけではない」といったら、少し言い過ぎですが、とにかくプログラムの中のひとつのきっかけとして、地域課題があるということですね。学生たちにこれから、思考法や、身につけてもらいたい何かのひとつのきっかけになるのが、身近にある地域課題であって、それが新しい教養教育のひとつの柱になっているということです。

私もいろいろなところで「また地域か」と思ったことも何度かあるのですが、でもやはり身近にあるものを何かひとつきっかけにして、人間性が向上していくとか、力がついていくという意味では、COC事業に採択されて良かったなと思っています。

ですので、「グローバルマインドを持って」という部分は欠かせないところなんですね。グローバルの捉え方はそれぞれあるかと思いますが、グローバルマインドを持って地域に貢献する、地域課題を解決していくというのが大切なのであって、非常に狭い範囲で留まって、何かを小さくやるということでは決してない、ということです。

曾我：私は実はアフリカを専門にしております。一方では地域を志向することの重要性を言っておりますけれども、グローバルな現

象を考えることも当然地域を考えることに重なるだろうと思っております。

その意味で、地域志向といったときに、弘前大学が地域に萎縮するようなものであっては駄目だ、と思うんですね。また、これは先ほどの米田さんの話にもありましたけれど、地域特性や地域課題が本当にその地域だけの特有なものか考える必要があると思います。

例えば、アフリカも今は人口が増えていますけれども、30年後にはまったく日本と同じような問題を抱えそうだ、という予感もいたします。そうであれば、今ここに見られる現象が、青森だけのことだと考えては駄目だと思えます。やはり地域のことを考えるといったときには、その背後にある普遍的なことで、どこにでもアプリカブル(当てはまる)なことを考えていくことが、とても大事だろうと思っています。

それから、弘前大学で学んだ学生が青森地域を好きになって、青森で活躍してほしいと思っていますが、それは同時に、1回東京に出かけていくとか、あるいは海外で活躍することと、何ら矛盾することではないとやはり考えております。是非とも、いろいろなところで活躍し、一方で青森とも繋がりを持っていただく。あるいはスキルや知識を身につけて、将来的に青森に帰ってきて活躍していただく。それがとても大切だろうと思えます。「鮭が産まれた川に何年か経って戻ってくるのは、その川の匂いを知っているからだ」という言い方がありますが、弘前大学で学ぶことによって、青森の良い香りを吸って、出て行ってほしいな、と感じています。安田理事、山形ではいかがでしょう？

安田：学生諸君が外に出ていろいろ気づく点が多いですし、それは学生諸君の人生も含めて、いろいろな肥やしになると思います。そのような意味で一度学生諸君が県外や海外に出て学ぶことの重要性については、他のパネリストの皆さんと同じ意見です。そして、企

業や県も含めて、「県外や海外で働いている人が県内に帰ってきやすいシステム」を作ることが必要に思います。そのようなシステムを作ると、Uターンなどがうまく機能すると思います。そのようなシステムを、いろいろな関係者の方々の意見を出しながら作っていくことが必要に思います。山形大学も、山形県などに提案したいと考えます。

曾我：すでに青森県、あるいは弘前市などでも、社会人として活躍してこられた方々を採用するという動きが出ていると聞いております。米田さん、企業はどうなんでしょう？

米田：やはり県内の企業では、高給の人は人材としては欲しくても、なかなか採用できないというところがあると思います。経済産業省では、首都圏のシニアとか、経験を積んだ人間を地方に、全国各地に分散させようという後押しをかなり強く始めていまして、新年度もかなり予算がついていますので、そのような動きが加速するだろうと思います。逆に言うと、弘前大学の学生は、県内の就職先を奪われかねないということにも繋がるのかもしれない。企業はその方向に向かってシフトしていく動きが強くなっていると感じています。

曾我：時間が迫ってきましたので、これにて、パネルディスカッションを終了したいと思います。パネリストの皆さん、今日は本当にありがとうございました。

■ 平成26年度弘前大学COCシンポジウム チラシ



平成26年度採択 文部科学省「地(知)の拠点整備事業」
青森ブランドの価値を創る地域人財の育成



平成26年度 弘前大学 COCシンポジウム

地域の視点から 教育改革を考える

日時
平成27年 **3月3日【火】**
10:00 - 12:15

会場
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大
8階 八甲田ホール (弘前市文京町3番地)
入場無料・事前申込は不要です

主催
国立大学法人 弘前大学



プログラム

■ **学長挨拶** 弘前大学長 佐藤 敬

■ **基調講演**
「地域の大学とその教育について」
山形大学 理事・副学長 安田 弘法

■ **パネルディスカッション**
「ユニバーサルな視点を持って地域課題解決に取り組む人材とは」

【パネリスト】
山形大学 理事・副学長 安田 弘法
弘前大学 理事・副学長 伊藤 成治
NPO法人プラットフォームあおもり 理事長 米田 大吉
弘前大学 人文学部 経済経営課程 4年 田中 雄大

【コーディネーター】
弘前大学 副理事・人文学部教授 曾我 亨



山形大学 理事・副学長
安田 弘法 氏

【問合せ先】
弘前大学 COC推進室
(学務部教務課教育改革推進室)
TEL 0172-39-3305 / 3306
FAX 0172-39-3309
Mail coc@cc.hirosaki-u.ac.jp
Web http://coc.hirosaki-u.ac.jp

地域の視点から 教育改革を考える

文部科学省 地(知)の拠点

■「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」とは

地(知)の拠点整備事業=大学COC(Center Of Community)事業は、大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を、文部科学省が支援する事業です。

課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としています。

青森ブランドの価値を創る地域人財の育成

1. グローバルマインドを持ち、地域に対する愛着、地域の創造を目指す意欲をもった人財。
2. 複雑化する地域課題に文理の枠を越えて、総合的にアプローチできる文理融合型の人財。
3. 獲得した専門知を活用して、地域の課題解決を主導できる人財。

弘前大学は、平成26年度に、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択されました。

人口減少等の課題を克服し、「青森ブランド」価値の創造を目指す青森県、「笑顔ひろさき」プロジェクトを進める弘前市と協働し、青森を愛する気持ちを礎として新しい未来を切り開き、地域の産業・生活・社会システムに新たな価値を創造できる「人財」を育成することを目的としています。

■ 交通アクセス

弘前大学創立60周年記念会館
コラボ弘大 8階 八甲田ホール
 (弘前市文京町3番地)

ご来場の際は、公共交通機関をご利用下さい。



■ 講師・パネリスト・コーディネーター紹介



○ 講師・パネリスト

山形大学 理事・副学長
安田 弘法

(やすだ ひるのり)

平成 4年 山形大学助手
 平成10年 山形大学助教授
 平成13年 山形大学教授
 平成17年 山形大学評議員・副学部長
 平成19年 山形大学農学部長
 平成23年 山形大学理事(社会連携・国際交流担当)・副学長
 平成26年 山形大学理事(教育・国際交流担当)・副学長



○ パネリスト

弘前大学 理事・副学長
伊藤 成治

(いとう しげはる)

昭和62年 早稲田大学助手
 平成 2年 弘前大学助教授
 平成12年 弘前大学教授
 平成24年 弘前大学教育学部長
 大学院教育学研究科長
 平成26年 弘前大学理事(教育担当)・副学長



○ パネリスト

NPO法人プラットフォームあおもり 理事長
米田 大吉

(よなた だいきち)

(株)西友勤務を経て、平成23年に人材育成・採用・定着などのコンサルティング、企業支援等を行うNPO法人「プラットフォームあおもり」を設立。

・経済産業省 地域人材育成コーディネーター
 ・農林水産省 6次産業化プランナー(青森県担当)
 ・青森市あおもり産品販売促進アドバイザー



○ パネリスト

弘前大学 人文学部 経済経営課程 4年
田中 雄大

(たなか ゆうだい)

平成23年 弘前大学人文学部経済経営課程 入学
 平成25年 ビジネスマネジメント講座(森樹男教授)ゼミ長に就任
 平成25年 (株)小林紙工との連携による「ご当地かき水シロップの開発及び販売プロジェクト」に参加
 平成27年 弘前大学人文学部経済経営課程 卒業予定



○ コーディネーター

弘前大学 副理事・人文学部教授
曽我 亨

(そが とおる)

平成 8年 弘前大学助手
 平成12年 弘前大学助教授
 平成22年 弘前大学教授
 平成24年 弘前大学生涯学習教育研究センター長
 平成26年 弘前大学副理事

【問合せ先】

弘前大学 **COC推進室**
 (学務部教務課 教育改革推進室)

〒036-8560 弘前市文京町1番地 総合教育棟1階
 TEL 0172-39-3305 / 3306 FAX 0172-39-3309

Mail coc@cc.hirosaki-u.ac.jp
 Web <http://coc.hirosaki-u.ac.jp>



文部科学省

地(知)の拠点